

●コレクション・データ

時代 弥生時代 後期
採集地 唐古・鍵遺跡 第48次調査
発見年 1992年
大きさ 長さ30.6cm・幅5.4cm
展示位置 第2室・「土器をつくる」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 31

土器づくりに使われた タタキ板

素材が何であれ私たちの日常生活において、容器は欠かせないものの一つです。特に弥生時代では、素焼きの容器―弥生土器―がたくさん作られました。日本の歴史上で弥生土器の生産量は、最も多い土器の一つでしょう。今回はそんな土器づくりに使われた道具を紹介します。

この道具は、羽子板のような形をした「タタキ板」と呼ばれるもので、ヤマグワの板材の一端に、棒状の把手を作りだしたものです。この把手を握り、上半部の平坦面で土器の外面を叩くためのものです。

弥生土器は、紐状の粘土を積み上げて成形します。タタキ板はその粘土紐を密着させ、土器の表面を叩き締めることで凹凸をなくし、形を整えることができます。また、土器の内面には当て具として、拳ほどの丸い河原石などを用いたと考えられます。弥生時代のタタキ板の出土は3例ほどしかなく、大変少ないのですが、土器の外面を観察すると、タタキ板の痕跡である平

行する線条の凹凸が多くみられます。これはタタキ板に線刻した平行線が、土器にスタンピングされたもので、弥生時代中期ごろから一般的になり、後期以降はさまざまな土器にみられるようになります。これは後期の土器づくりが簡素化したため、タタキ板の痕跡が消されずに残っているからです。

唐古・鍵遺跡のタタキ板には、平行する線条の凹凸がありません。これは板に平行線を刻んだのか、あるいはこれを使い込むうちに木目が浮き出てきたものなのか、残念ながら使い込まれているため区別はつきません。しかし、唐古・鍵遺跡の例は、弥生時代後期にみられる一般的なタタキ文様です。

土器作りを民族的にみれば、タタキ板を用いない手法もありさまざまです。しかし、多くの弥生土器にみられるタタキ板の痕跡は、弥生土器づくりに欠かせない道具であったことを示しており、唐古・鍵遺跡の出土品がそれを証明しているのです。

唐古・鍵考古学
ミュージアム
【 ☎ 34・7100 】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人 200円（150円）
▼高校生・大学生 100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置

